



こまごえごろはち 駒越五郎八と横山池

芸濃総合文化センターの西側から、横山池の長い堤が望めます。この池は中縄地区と棕本地区の間に位置する農業用の大きな溜め池で、堤高は7.7m、貯水量は53万7,000m³あります。

元文5(1740)年の記録によると、かつての横山池は現在「旧池」と呼ばれている北側の小さな溜め池でした。江戸時代末期、安濃川から取水し、池の水を農業用水として水田に安定して供給できるよう、棕本の商人で庄屋加談役の駒越五郎八が津藩に掛け合い、文久2(1862)年から慶応2(1866)年にかけて約2万両の私財を費やし、池を「中池」「新池」の範囲へと拡張したといわれています。



上空から見た横山池(昭和50年)

横山池は河岸段丘の高台にあるため、安濃川から水を引くことは困難でしたが、安濃川の上流に位置する河内地区田茂ヶ平から取水し、約4kmに渡って忍田地区の北側の山沿いを通し、池の南西へ取り入れました。低地から高台に向け川の水を導水し、また山の岩盤を掘削して水路を造るなど、当時の技術では難しい事業であったと考えられますが、この開発により棕本地区の北側に広がる200haの水田に加えて、荒地であった豊久野地区まで水田として開墾され、年間で約500俵の米が収穫されるまでになりました。

池の東側の堤防沿いには伊勢別街道が通っており、この功績を築いた駒越五郎八の屋敷は、

かつて街道沿いの棕本宿の中ほどにありました。屋敷は土塀に囲まれ、入り口には大きな石組の土台の蔵がありましたが、荒廃が進んだことから現在は全て取り壊されています。江戸時代には大名や旗本、幕府の役人などが宿泊する棕本宿の脇本陣としても利用され、明治天皇の伊勢神宮参拝では小休所として屋敷内の書院が使われました。

駒越五郎八は、明治11(1878)年に84歳で没し、棕本宿の入り口に当たる場所に、その功績をたたえる「駒越翁彰功碑」が建てられています。冬になると横山池には、渡り鳥が飛来し水面で羽を休めています。



横山池



横山池沿いに建つ駒越翁彰功碑

